

## 令和6年度第2学期終業式式辞

おはようございます。

穎明館生の皆さん、第2学期の最終日、きちんと区切りをつけて前に進みたいものです。先生方の言葉をしっかり受けとめ、自分自身を見つめ直すよい機会にしてください。

6年生、38期生の皆さん、追い込みの時期ですね。「現役生は受験当日まで伸びる」。自分を信じて、焦らず、慌てず、怠らず、着実に努力を続けてください。

さて、今日は「代表的日本人」の話をしたいと思います。2024年、令和6年の代表的日本人といえば、やはりメジャーリーガー大谷翔平選手が挙げられるでしょう。今年もきっと大谷選手の活躍に日々、励まされてきた日本人は、多かつたのではないのでしょうか。54HR、59盗塁の立派な成績を残し、ドジャースの地区優勝に大きく貢献し、悲願のワールドシリーズを制覇、2年連続3度目のMVPも受賞しました。来シーズンはまた、投打二刀流の活躍を見せてくれることでしょう。進化する大谷選手のこれからがますます楽しみです。

また、今年はパリオリンピック、パラリンピックでの日本選手の活躍も顕著でした。メダリストが脚光を浴びがちですが、日の丸を背負って躍動する全ての選手には日本人としての誇り、美しさをも感じさせてくれました。まさに代表的日本人の姿がそこにはありました。

スポーツ以外の話題ではどうでしょうか。今年の7月、約20年ぶりに1万円、5000円、1000円の紙幣（日本銀行券）のデザインが刷新され、それぞれ肖像が変わりました。1万円札は「日本資本主義の父」といわれた渋沢栄一、5000円札が津田塾大学創立者の津田梅子、1000円札が「近代日本医学の父」とされる北里柴三郎です。新たに紙幣の顔になった3人はいずれも明治時代を中心に活躍した、まさに代表的日本人と言って過言ではないでしょう。

ところで皆さんは、『Representative Men of Japan(代表的日本人)』という書物を知っていますか。今から百年以上前、内村鑑三が日本の文化や精神を英語で西欧に紹介した本です。皆さんも内村鑑三については、歴史や倫理でも勉強したでしょう。宗教家、思想家として、聖書研究を中心に「無教会主義」を唱えた人です。「武士道の上に接ぎ木されたる基督教」、「二つのJ」、「不敬事件」と言えば思い出しますか。人物像を簡単に紹介します。

1861年、高崎藩士の子として生まれた内村は、幼い頃から儒学を学び、侍の子としての自覚や自尊心を、大切にしていたようです。10歳の頃より英語を学び始め、16歳で北海道大学の前身である札幌農学校に入学します。のちに『武士道』を書くことになる新渡戸稲造とは同期生でした。20歳で札幌農学校を卒業した後、役人の仕事をしていましたが、伝道者に

なるために辞職。23歳のときにキリスト教の国を自分の目で確かめるべく、私費でアメリカへ渡り本格的に回心しますが、その後、神学教育に失望して神学校を退学、帰国します。帰国後、教師や著述活動などを経て、伝道者として本格的に歩むようになります。

ここに岩波文庫『代表的日本人』を持ってきました。「はじめに」の箇所を読み上げます。

この小著は、一三年前の日清戦争中に『日本及び日本人』(Japan and the Japanese)の題で公刊された書物の再版であります。その本の主要部分を含み、親切な人の手による数多くの訂正を加えたものであります。青年期に抱いていた、わが国に対する愛着はまったくさめているものの、わが国民の持つ多くの美点に、私は目を閉ざしていることはできません。日本が、今もなお「わが祈り、わが望み、わが力惜しみなく」注ぐ、唯一の国土であることには変わりありません。わが国民の持つ長所——私どもにあるとされがちな無批判な忠誠心や血なまぐさい愛国心とは別のもの——を外の世界に知らせる一助となることが、おそらく外国語による私の最後の書物となる本書の目的であります。

内村が、この著書で、日本を代表する人物としてとり挙げたのが、西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮上人の5人です。それぞれの生涯、とりわけその内面、精神を紹介しています。欧米人がイメージしやすいよう、聖書の言葉を引用したり、欧米の歴史的人物を引き合いに出したりしながら、日本人の姿、精神が浮き彫りになるように描かれた略伝、と言えるでしょう。西郷隆盛から日蓮上人へと、時代をさかのぼって紹介しているので、そこには仏教、儒教などの東洋思想が共通して見られます。そして、どの人物にもあったキリスト教的要素を示そうとしていることが特徴的です。

皆さん、想像してみてください。インターネットはもとより、ラジオもテレビもなかった百年以上も前に、日本や日本人のことを海外の人たちに正しく理解してもらうためには、大変な努力が必要だったと思います。それも英語で紹介するわけですから、まさに偉業です。

内村は、西欧文明、キリスト教文明に優越感を抱いている人たちに数多く接し、「いや、非キリスト教国の日本にも、西欧人に勝るとも劣らない人たちがいた」と繰り返し、熱く思い続けていたはずです。

このような思いは、グローバル社会と言われる現代でもなお、多くの日本人が抱いているのではないのでしょうか。キリスト教圏に限らず異文化圏に衝突すると、自分とは何者か、日本人とは何か、というアイデンティティの問題を考えざるを得ません。自分とは、他者があって初めてその関係性で意識されます。海外体験学習を経験した高校生の皆さんは、わかる

でしょう。他者がいるから自分、国籍の違う人がいるから日本人、というものが強く意識されます。様々な文化や風習の違いに直面して、「なぜ違うのか」と考えつつも、「人間としての根本は変わらない」という気づきもあります。その気づきから興味をもって調べたり、学んだりすることが、他者他国理解、自分自国理解へとつながるのではないのでしょうか。

『代表的日本人』を読むと、内村が立派な日本人の存在を欧米人に知らせようとしただけでなく、日本人としてのアイデンティティを再確認していたことがわかります。内村が美德としてとらえていた、武士道に通じる志の高さと使命感といった日本の伝統文化は、どうでしょうか。まだまだなくなっていないと信じたいところです。この本で紹介されている5人はいずれも、改革者、指導者として、日本に影響を及ぼした人たちです。代表的日本人、こうした人たちがもっと多く現れることを期待します。もちろん、代表的日本人の在り方生き方に学ぶことは誰にでもできるはずです。穎明館生にも期待しています。まずはぜひ、この『代表的日本人』を読んでみてください。

最後にもう一つ、内村がアーモスト大学で回心した25歳のとき、「わが墓に刻まれるべきことば」として、愛用の聖書の見返しに書き込んだ言葉が有名です。

I for Japan, Japan for the World, The World for Christ, And All for God.

(われは日本のために、日本は世界のために、世界はキリストのために、そして万物は神のために)

この気持ちを胸に、「二つのJ」、つまり Jesus (イエス) と Japan (日本) を愛して歩み続けた内村鑑三 69年の生涯でした。

私は今回、式辞で内村の話をするにあたり、先日、突き動かされる思いで、内村が眠っている東京都立多磨霊園のお墓にお参りをしてきました。墓碑銘として刻まれた英語を、静かにかみしめました。

I for Japan, Japan for the World, The World for Christ, And All for God.

私は、あなたは、だれかのために、なにかのために生きられているのでしょうか。

今日は内村鑑三の『Representative Men of Japan(代表的日本人)』から考えてみました。冬休みは短いけれど、自分自身を見つめる、日本人としてのアイデンティティを考える絶好の時期だと思います。皆さんが、それぞれのかけがえのない人生を大切にするためにも、時に立ち止まってじっくりと考えることは必要です。穎明館生の皆さん、自分自身の在り方生き方を考えてみてください。そして新年、第3学期始業式にまた元気に会いましょう。

以上、令和6年度第2学期終業式式辞といたします。